

『書はどういふ芸術か』(五)

中村素堂

われわれが書を書いていて、よく書がいいとか悪いとかいわれるのですが、随分見当はずれのお賞めの言葉をいただいて、困るなと思うことがある。あなたの字はわかりいいなんていうのは困るんです。わかりよいでしょうけれども、芸術的に高いのも何でもない。そんなことがすぐれたこと、条件にされるのは全くつらい。賞めているのか侮辱されているのかわからない。そういうわけで、人間の好き嫌い、造詣の深さ、理解力、環境などによって、価値判断は違ってくる。三味線などいい例です。花柳界の近所に住んでいて、朝夕いい三味線の音を聞いていた人、反対に三味線という一流の三味線引きの三味線を聞いていた人、反対に三味線というと、すぐ低級な方の芸者を連想して、あれは下等なもので嫌だと三味線を聞くことを大変侮辱する人がいる。そういうふうで生活環境とか造詣の深さなどで、価値判断がまるで違ってきて、制作者、演奏者の意図と全然違った額面において、受け取られているということがむしろ本当でしょう。まあ世間における価値判断は大体人気でやっている。この人は有名な作家だ、世間でもはやされているんだといえ、すごいなあーと思っただけで見ている。世間の評判の高い人だからいいのだろうと思っただけ、高い価値なのはこのかなあーと、みつけようとしている。逆なんです。いいところを見つけて賞めているんじゃない。日本人は特にそういうところがあるといわれています。有名でなくてもいいものはいいので浮世絵などはいい例です。あれは自分の国だけでつくられた芸術です。しかも民衆芸術という貴重性がある。つまり国民大衆という非常に数の多い層の中から生まれてきた芸術です。それを自分の国で珍重しなかつた。ところが外国の有名な芸術家達、ピカソなどが浮世絵を大事にして、高い金を出して買うんです。しかもピカソは、浮世絵を臨んでいるでしょう。驚きまして、あわてて日本で浮世絵の値段がピンとはね上がって、そこでどこがいいのだろうと研究し始めて、こんな高い値になってしまった。人が賞めるとあわてるんです。理解力です。いいものを見極める鋭敏な理解力です。それが浮世絵の価値を見い出し

た。書の方では良寛などいい例です。この人の書も初めは越後の人達が自分の近所にいた坊さんの書いたもので、何か楽しそうに書いてあるといったくらいのものであったのが、会津八一先生や糸魚川の近辺の芸術家たちが、東京に持ち出して来て、著名な人に紹介するとといったことから有名になって、良寛など全くわからない人達まで、わいわいさわいで高い値で買う。

『列子』という書物の中に「知音」という故事があります。これは随分有名な話ですが、伯牙という琴の大家がいた。波に鐘子期という友達がいって、非常に伯牙の琴を理解した。伯牙が大河の流れを思っただけで「君の今弾いた音は洋々たる大河のようだ」という。悲しい時には「君は何が悲しいんだ」という。伯牙はうれしくて、鐘子期がくると琴に糸を張って弾いた。ところがこの鐘子期が先に死んだ。それっきり伯牙は琴から糸をはずして、生涯弾かなかつた。有名な話です。「知音」とは、今では親友の意味に使いますが、本当は芸術の鑑賞のことです。この話からも、芸術家はいかに孤独であるかがわかる。孤独に堪えられるものでなければ、芸術は出来ないのではないでしょうか。人気だけを気にして、人気を沸かすためにものをやっている人には芸術は出来ません。世間に売れるとか売れないとか、人気があるとかないとかは関係なしに、自分が表現したいものに向かって、その評価のいかんにかかわらず純粹にやる、それが本当の芸術だと思ふ。価値判断の中で、芸術家が価値をもたせるためにものを書くと思ひ出したら、不純なものではないか。そうすると芸術は孤独なものだということになります。そのところをよく価値の問題と絡んで、錯綜したものの考えをしているのではないかと、こんなふう思います。

大分話が広がってしまいましたが、まだまだこまかい分析も必要なので、書が抽象芸術なら、抽象にはどんな分類があるか、ということもわかっているなければ、抽象的なものを捉えることはできない。その方法の根柢に対する追求もしなければならぬと、問題は沢山あります。ただ、書道は抽象芸術であること、芸術であるなら芸術とはどういうものか、そしてその価値とは何かの大意をお話ししてみた次第です。